

## シルクロードの織物を考える

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横張, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1574">http://hdl.handle.net/2297/1574</a>

# シルクロードの織物を考えるーサミットの成立

横張 和子

シルクロードの織物を考える、その要旨はすなわち「経錦」から「緯錦」への変遷をシルクロード上に辿ろうとするもので、古代織物史における一つの古典的達成をサミットの成立と空引機の創造にみよようとしている（図1）。

サミット *Samit*, *Samitum* は、フランスの用語でヨーロッパ中世の織物の名称に使われているが、その古典的サミット *Samit classique* は、日本上代の錦で言うところの「複様三枚綾組織の緯錦」に相当する。上代錦にその作品を見出そうとするならば、法隆寺に伝来する四騎獅子狩文錦はその典型であろう（図2）。周知のように東西文化の諸要素が混淆するこの中国製の錦は、西アジアと中国の文化交流の比較研究の好個な資料として、多くの研究者によって注目され論じられてきた。しかし、その図像学的研究にまさって、これは古代の絹織物とりわけその製作技術の発展史からみるべきものと考えた。以来、今日まで一貫してその作業を続けているが、古代絹織物の問題は大きく分けて、東西と南北の二つの軸で展望し考察するのがよいのではないかと考えるようになった。すなわちシルクロードにおける絹問題は東西の軸で、対して南北のそれは東南アジア半島部から東アジアの、とりわけ絹生産地の全体を軸とする見方である。南北では、絹技術の歴史はさしたる変動を見ることなく伝統技術が続けられていたとみている。それに対して東西では決定的な変革があったと考えるのである。その結果として生まれてきたのがサミット技法であったとみている。中国の絹織物が運ばれていたその道すがらは毛織物の産地であった。その道で、東西の異質の織物文化が出会った。その出会いにおいてきわめて構造的な技術革新が行われたのである。それゆえ仮にそうした遭遇がなかったならば、サミットは生まれてこなかったかもしれないし、したがって法隆寺錦も成立しなかったであろうと考えている。この革新的な技術は、今日行われている紋織技術の祖となるものであり、ここから模様で飾られた世界の美しい織物の歴史が始まると言ってよい。

サミットの名において、わが国上代緯錦とヨーロッパ所在の中世緯錦とは同じステージで語ることが出来るわけだが、実際に、同じ技法、類似の意匠（狩獵円文）の錦を少なからず見出している（図3）。すなわち8世紀においてサミットとそれを製作する空引機が古典的完成をみ、世界化したと言えることが出来る。

シルクロードの名称から得るところの印象は豊かな絹織物のイメージのようだが、実際にはそこは牧畜地帯であって、人々の織物の主要な原料は毛であった。シルクロードが開通する以前、そこに住む人々は絹をみたこともなく、無縁のものでしかなかったであろう。しかし、そこには魅力的な毛織物の文化が花を咲かせていた。やがてシルクロードはそのようなところを東西に通じ、織物文化の東西交流が始まった。そのような流れの中で、中国の綾や錦の紋織技術 *Façonné* が、毛織物の織り *Armure* の技術に食い込み、結果として、それまで人類がもつことのなかった新技術を生み出したのである。シルクロードはすなわち技術革新の道であったと言ってよいであろう。

東西ではそれぞれが独自の織物文化を育てていた。東の絹織物に対して西は毛織物であったが、

用いられる毛糸の性質は、絹とはまったく対照的であった。毛の繊維は短く、その表面は鱗状でざらつき、摩擦や圧迫で揃みやすく、経糸として不向きである。そのために初めから糸にしないで、熱と湿りけを与え縮絨してフェルトにした。また経糸に負担のかからない織物作りをしていた。その有力なものが絨毯や綴織の製作である。また経糸と緯糸の交錯の比を少なくした綾織(斜文組織)が行われており、そのヴァリエーションは豊富であった。平織も行われていたが、多くの場合、経糸の密度は疎、緯糸は密であり、模様を作るには、経糸を隠して緯糸の色ですることが普通であった。そんな織り方、つまり綴れ地合の手法で、西アジアの紫意匠を、平地合の亜麻地や毛織地に織り込んでいた。

対するは、中国の絹によって、しかしそれが「生糸」であることだが、その使用が豊富に許されるところに、経糸を頻繁に動かしてする紋織 *Façonné* の技術が生まれてきたとみている。紋織は平組織や綾組織といった一般組織 *armure* を地として、そこに花や鳥などの具象的な模様を、織物の全面に限無く、機械的に反復して織り込む技術である。綴織を紋織と見做す見方があるが、これは織り *armure* の部類であって、紋織のような複雑な仕掛けを必要としない。紋織は地の組織を作る綜統装置に加えて模様を作るものでなくては成立しない。経糸はこれらの装置に仕掛けられて二重の操作(力)をこうむる。それゆえ、糸は強くなければならぬ。生糸はその長さ1000メートルにも達し、繊維の表面は滑らかでかたく、しかも弾力性に富んでいる。そのような性質は経糸として恰好な条件であった。それゆえ中国の絹織物は経糸が緯糸を隠してしまうような織り方が可能であったし、経糸が常に支配的であり主役であった。例外もなしとはしないが、その場合は、生糸は使われていない。屑絹が有効に使われているのである。そして緯糸顕紋の形をとっている。ともかく中国は生糸の生産において完全な独占企業を確立し、経糸顕紋の織物作りが規範となり伝統化していた。経錦技法は戦国時代(前3世紀)にすでに完璧な仕上がりであった。続く漢代を通じて経錦や平地綾(綺)が世界史に覇権を誇っていたのは誰もが認めるところであろう(図4)。

こうして絹織物における経糸優位に対して、毛織物は緯糸の役割が大きかった。綴織は西方における織物装飾術の最も有力なものであったが、その技術の特色は、緯糸の色とする絵画的手法を顕著に発展させていた。その大作が一昨年日本で展示された。新疆の和田近傍で発見された綴織「槍をもつ武人像」壁掛け(2世紀)は、やがてくるビザンティン美術を予告するような東方ヘレニズムの特質をよく表している(図5)。線描化(東方化)への傾向を強めながらも、なお微妙な肉付け法によって血色のよい若い戦士の顔貌を表現している。これにはまた、ギリシャ神話のケンタロウス像が描かれ、この壁掛けの原郷について、有力な絵画流派が存在していたクシャン朝下のバクトリア地方を考えさせている。

西方の綴れ技法が織物装飾や絵画的描出に優れた機能をもつものであることは認められたが、手先の仕事であるために、生産効率は紋織に著しく劣っていた。それゆえ西方人は東方の紋織技術を見過ごすことが出来なかった。しかし、彼らの毛糸をもって中国錦を模することは、糸の性質からして困難であった。そこで中国経錦の組織を90度回転して顕紋の糸を経糸から緯糸に替えたのである。ここに「緯錦の成立」をみることになる。と言っても織機における経糸の役割は変わらない。そのため綜統装置を変えた。そのメカニズムを今ここで詳しく述べるには紙面の余裕がない。それゆえ図1-Bを参照されたい。そこで見られるように緯錦では経糸の働きは地と紋の2機能に分化して経糸の設計がし易くなった。緯錦の成立は、結果的には新技術の創造となったが、しかしそれは漢錦技法を毛織物に適合させるための現実的な工夫であった。それゆえ当初は漢錦に似せて作ろうとしたらしい。「漢

錦写し」と考えられる平地の緯錦がローランやロプ沙漠（3世紀）から、またトルファンのアスターナ墳墓（4世紀）から出土している。なかには経糸に毛糸を用いたものもある。これらは織物組織の方向を変えると共に模様も同様に変えた。そのため経糸方向にのみ繰り返されていた模様が緯糸方向に並ぶようになった（図6）。

中国の錦や綾の技術は、同じ模様の繰り返しを「経糸方向」に行うことで紋織の第一義的機能を実現させていた。しかし現代紋織で見ると、単位的な紋様を経糸方向のみならず、「緯糸方向」にも並べて面的展開を可能とすることにおいて完結をみるべきものであった。空引機はこれを実現していた。空引機の中国起源説はかつて世界的な定説であった。しかし、経糸顕紋を条件とする経錦製作に空引機の機能が合わないことが、欧米の研究者によって明らかにされた。全面を完全な経糸の面とすることを必須の条件としている経錦製作に空引機の綜統装置は適合せず、実際のところ不可能と見做されてきている。では経錦はどのようなシステムで製作されていたのか、それが問題だが、今、前述と同じ理由で詳述出来ない。ただフランスの用語で言うメチエ・ア・バゲット *Métier à 'baguettes'*（便宜上「棒綜統」）の理論で考えるのが合理的であり、実際の分析研究がそれを証拠立てているとだけ述べる。分析は、紋様の繰り返しが経て糸方向のみであることも明らかにしている。対して緯錦技法とジャカード・マシン *Mécanique Jacquard* の原理を実現した空引機は、緯糸方向への繰り返しが可能とし、そのシステムから容易に、また省力を目的に、対の紋章風形式の意匠を作る装置をも導き出した。これを「屏風加間」 *Chemin à retour* と呼ぶが、法隆寺錦や他のサミットにもみるように錦の常套の手段となった（図7）。リーグルの『美術様式論』における織物模様と紋章形様式論の混乱は、このような見方において幾分整理されるであろう。織物芸術では、ある装飾形式をのぞんでも技術がなければ実現させることは出来ない。技術の考察なしに模様や意匠の様式からだけする織物論は十分とは言えない。

漢錦の西方的アダプテーションとして出現した平地緯錦は、その地組織を西方の毛織物で行われていた2対1斜文（三枚綾組織）に変え、ここに古典的サミットを実現させた。サミット技法が完成した地としてササン朝ペルシアは最有力候補であるが、より広く毛織物圏にあったことは間違いのないであろう。厳正な対の紋様をもつサミットは、空引機により量産され、それが東方にも流入してくる。中国古文献はそれが5世紀から6世紀にわたってであることを記している。しかし、この間も中国本土の南北では豊富な生糸の生産を背景にして古来の織技が綿々と墨守されていた。だが、ペルシア錦を見た中国織匠は、おそらく衝撃的な印象を受けたであろう。かつて西方人がしたようにその模倣を願望したのであろう。しかし彼らにはまだ空引機はなかった。中国式ヴァージョンのペルシア錦文を織り込んだ六朝錦は、なお経錦技法で製作された。6世紀末、中央アジアの何国の出身と考えられる何稠が、皇帝のたつての願いで「組織殊麗」の波斯錦を初めて製作したことが『隋書』に見える。こうして本格的な空引機の中国導入と稼動が7世紀初め（初唐初期）に行われたと考えられるが、それはもはや世界的趨勢であった。すると経錦技法は消滅する。緯錦技法と空引機の生産性に太刀打ち出来なくなったからである。

法隆寺四騎獅子狩文錦の複雑な図像と技術は、この製作に関わった人的陣容とその文化的背景がきわめて国際的であったことを教えている。

（紙面の都合で註を省いた。古代オリエント博物館紀要における拙稿を参照されたい）

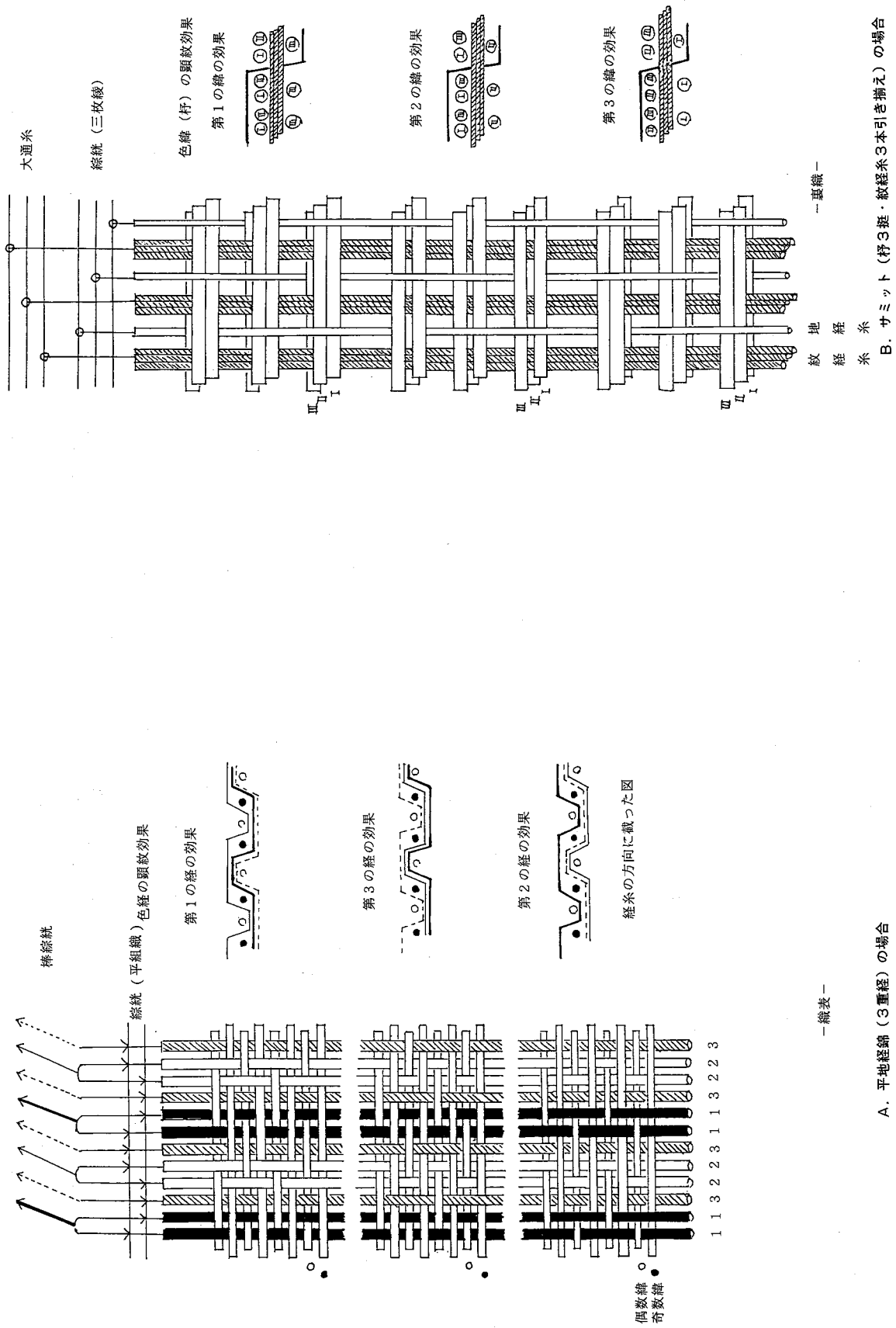


図1. 経錦 (A) とサミット (B) の機仕掛け理論図

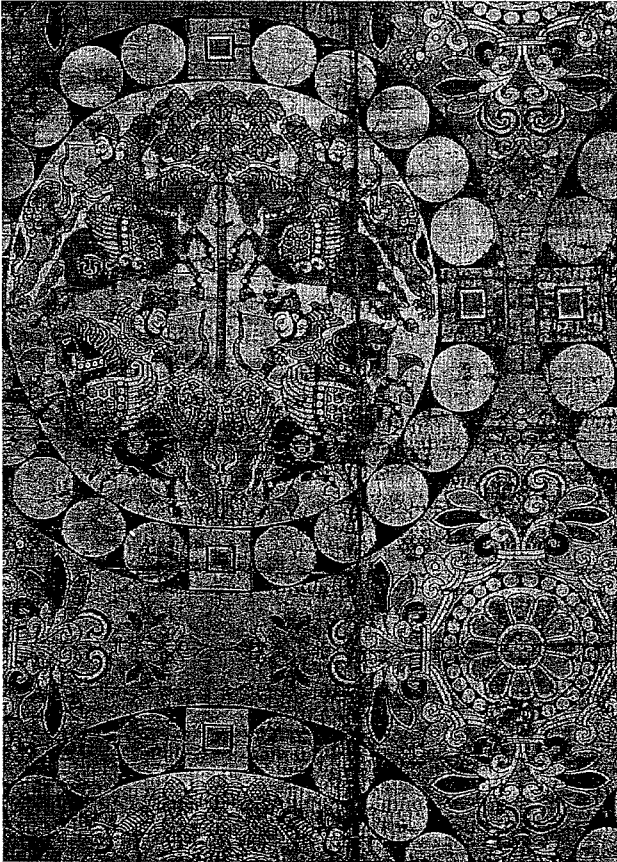


図2. 法隆寺四騎獅子狩文錦

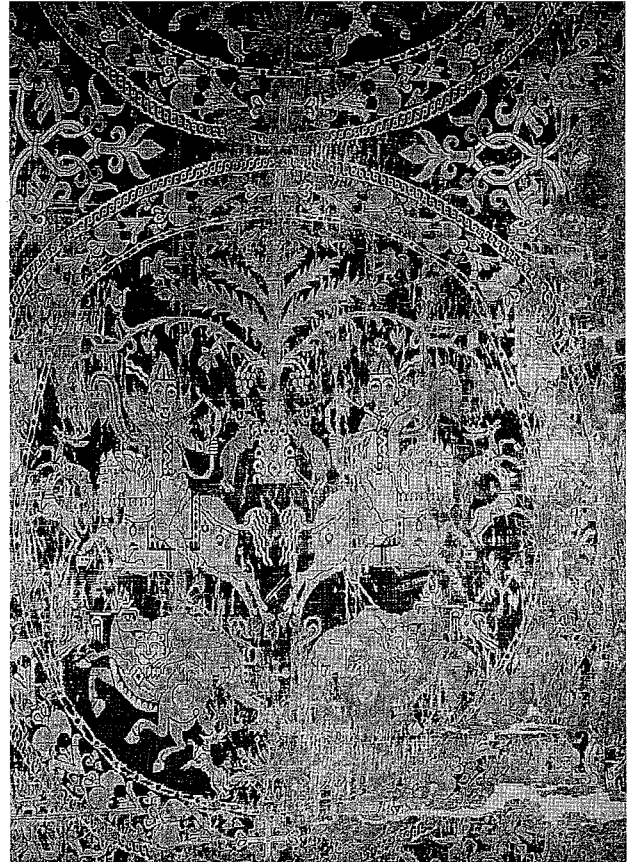


図3. ビザンティン・サミット



図4. 漢代経錦



図5. 綴織壁掛け

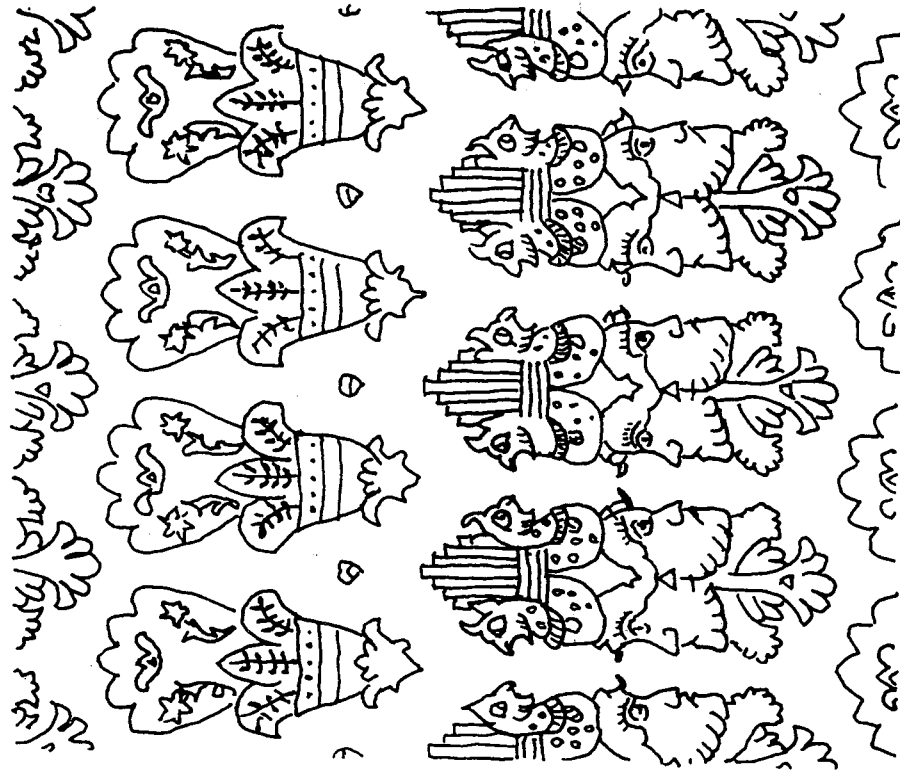


図7. ササン朝サミット

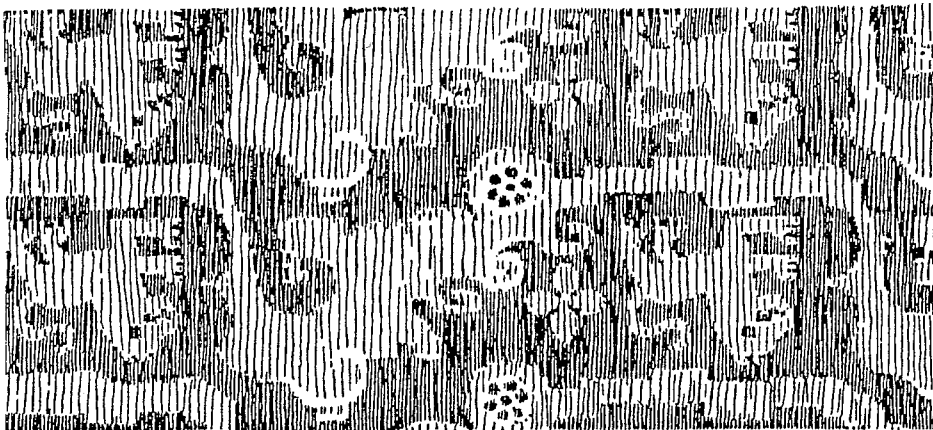


図6. 「漢錦写し」の経錦